2023.12.15 Vol.63
ISSN 0919-3626
郡山市立美術館ニュース
ザ・ルーフ

THE ROOF

アルバート・ジョゼフ・ムーア
《黄色いマーガレット》
1881 年　油彩・キャンバス　当館蔵

Contents

- 企画展「ロイヤル コペンハーゲンと北欧デザインの煌めき」
- 「祖父、土橋醇との対話」
- 新収蔵品紹介、常設展示のご案内
- Report
- Information

Art Nouveau to Modern

日欧プライベートコレクション

ロイヤル コペンハーゲンと北欧デザインの煌めき

アール・ヌーヴォーからモダンへ

Through the eyes of Japanese and European collectors
Royal Copenhagen and Scandinavian Design
Art Nouveau to Modern

「北欧」と聞いてどの国を思い浮かべるでしょうか。北欧とは一般にデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランドの五カ国を指します。北欧のなかでも本展では、デンマークとスウェーデンに焦点を当て、両国の洗練されたデザインをご紹介します。

デンマークでは、1775年、王室の支援により化学者のフランツ・ハインリヒ・ミュラーがコペンハーゲンに王室御用達の磁器工場を設立します。その後、すでにヨーロッパで本格的な磁器の製造を行っていたドイツのマイセン窯などから技術者を集め、1779年に正式に王立コペンハーゲン磁器製作所が発足しました。磁器製作所は、1868年に「ロイヤル」の称号を使用することを条件に民間へと売却されたことにより「ロイヤル コペンハーゲン」としてのスタートを切ることとなります。

ロイヤル コペンハーゲンの代名詞ともいえる〈ブルーフルーテッド〉シリーズ（図1）は、開窯当初から製造され、19世紀前半には一時衰退しますが、1885年に芸術監督として迎えられた建築家で画家のアーノルド・クローによって再興されます。クローは、浮世絵版画や掛軸など日本美術からの影響を大いに受け、花や虫、鳥といったモティーフをデザインに採り入れました。クローがデザインした〈マーガレット・サーヴィス〉（図2）は、器の口縁部にエンボスでマーガレットの花があしらわれ、ハンドル部分には蝶や蜻蛉の緻密な装飾が施されています。〈マーガレット・サーヴィス〉は、1900年のパリ万博でグランプリを獲得し、北欧アール・ヌーヴォーの先駆けとなりました。

図1
《皿〈ブルーフルーテッド〉》
ロイヤル コペンハーゲン
ペインター：マティアス・ハンセン・ウォルストロップ
1785年頃
塩川コレクション

図2
《花文サーヴィス〈マーガレット・サーヴィス〉》
ロイヤル コペンハーゲン
デザイン：アーノルド・クロー
1904-22年
塩川コレクション

デンマークで19世紀にロイヤル コペンハーゲンと人気を二分した陶磁器メーカーがありました。それが「ビング オー グレンダール」です。1895年に世界で初めてクリスマスプレート（イヤープレートとも）を制作したことで名を馳せましたが、1987年にロイヤル コペンハーゲンの傘下となり、現在その名はあまり知られていないかもしれません。

ロイヤル コペンハーゲンで彫塑師として活動していたフレデリック・ヴィルヘルム・グレンダールと、メイヤー・ヘルマン・ビング、ヤコブ・ヘルマン・ビング兄弟が1853年、コペンハーゲンに開窯しました。1885年に画家で服飾デザイナーのピエトロ・クローンが芸術監督として招かれると、ビング オー グレンダールは大きく飛躍することとなります。奇しくも同年にはアーノルド・クローがロイヤル コペンハーゲンの芸術監督となっており、二人は良きライバル関係でした。クローが絵画的な表現であるのに対し、彫刻的な表現を特徴としたクローン。1885年よりデザインを手がけたテーブルセット〈鷺のサーヴィス〉（図3、4）はまさにその典型です。モティーフとなっている鷺が器と一体化し、立体的に表現されています。クローンは1893年より没するまで、デンマークデザイン博物館の館長を務め、デンマークデザイン史に大きな足跡を残しました。

図3
《染付金彩鷺文皿》
ビング オー グレンダール
デザイン：ピエトロ・クローン
1886-88年
塩川コレクション

図4
《金彩鷺アイスバケット》
ビング オー グレンダール
デザイン：ピエトロ・クローン
1898-1914年
塩川コレクション

また、ビング オーグレンダールは、デンマークデザイン史において重要な人物を輩出しています。同社で陶工として働き、芸術家としてのキャリアを積んだジョージ・ジェンセンは、１９０４年、コペンハーゲンに銀細工工房「ジョージジェンセン」を設立しました。植物などアール・ヌーヴォー風のモティーフを採り入れ、銀や半貴石を使用した装飾品や銀食器を制作し、高く評価されました（図５）。表面には叩いた槌の跡を残し、溝や窪みに立体感を出す酸化仕上げを施すなど、ハンドクラフトならではの技法を駆使した独自のスタイルを創り上げ、１９２５年のパリ現代装飾美術産業美術博覧会（アール・デコ博覧会）ではグランプリを獲得しています。その輝かしい成績が認められ、デンマークとスウェーデン両国の王室御用達として採用されるブランドへと成長しました。

図５
《ソースポットとプレート no.177、レードル no.141、ブロッサムパターン》
ジョージ ジェンセン
ジョージ・ジェンセン
デザイン：1916 年頃
個人蔵

一方のスウェーデンには北欧最古の歴史を持つ窯「ロールストランド」があります。ロールストランドは、１７２６年に首都ストックホルムのロールストランド城内でドイツ人陶器職人ヨハン・ウォルフの指導のもと開窯しました。創業当初はまだ磁器を製造することは困難で、東洋の染付を模した陶器を製造していました。その後、技術の発展にともない19世紀後半に陶磁器製造を開始します。ロールストランドは、デンマークの２窯（ロイヤル コペンハーゲンとビング オーグレンダール）の特徴を折衷し、シンプルな器形でありながら彫刻的な要素も兼ね備えた作品を生み出しました（図６）。

図６
《藤花文花瓶》
ロールストランド
デヴィッド・ヤール
1898-99 年
塩川コレクション

スウェーデン南部のスモーランド地方は「北欧のクリスタル王国」の異名を持ち、古くからガラス工芸が盛んな地域です。同地方は工場の燃料として不可欠な木材を豊富に有していたため、多くのガラス工場が拠点を置きました。なかでも「オレフォス」と「コスタ」は、１９５０年代にその卓越したデザインにより、ガラスを芸術の域にまで高めました。

オレフォスは、１７２６年に製鉄工場として設立されたのが始まりで、１８９８年にガラス工場を設立し、ガラスの製造を開始します。１９１０年代にデザイナーとしてシモン・ガーテとエドヴァルド・ハルドの二人が入所すると、１９２５年にはアール・デコ博覧会でグランプリを獲得するなど、国際的なアートガラスメーカーへと成長しました。積極的に新しい技法を開発し、優れたデザイナーと一流の職人たちの共同作業によって生み出されるオレフォスのガラスは、世界中に認められています（図７）。

photo Michael Whiteway

図７
《花瓶〈ソンメルソ〉》
オレフォス
ニルス・ランドベリ
1955 年
個人蔵

コスタは、ヨーロッパの現存するガラス工場では最も古い歴史を持ち、１７４２年にスモーランドで設立されました。１８９７年のストックホルム美術・産業博覧会では、コスタをはじめスウェーデンのガラス製品が展示されましたが、批評家からの評価は芳しくありませんでした。以降、コスタでは芸術家をデザイナーとして採用するようになります。特筆すべきは、１９５０年から１９７３年までコスタでチーフデザイナー兼アートディレクターとして活躍したヴィッケ・リンドストランドです。リンドストランドは、１９４０年までオレフォスに在籍していましたが、戦後はコスタで「コローラ」技法を開発し、多様なデザインでコスタのガラス作品に大きな変化をもたらしました（図８）。

photo Michael Whiteway

図８
《鉢〈コローラ〉》
コスタ
ヴィッケ・リンドストランド
1954 年
個人蔵

デンマークでは Hygge（ヒュッゲ）、スウェーデンでは Fika（フィーカ）といったそれぞれ大切にしているライフスタイルがあり、どちらも親しい人とゆっくり時間を過ごすという点で共通しています。室内での暮らしを大切にしてきた北欧で育まれた煌めくデザインの数々をご堪能いただけたら幸いです。

（塚本　敬介）

企画展

日欧プライベートコレクション

ロイヤル コペンハーゲンと北欧デザインの煌めき

アール・ヌーヴォーからモダンへ

2024 年 1 月 30 日（火）～ 3 月 24 日（日）

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時（入館は午後 4 時 30 分まで）
休 館 日：毎週月曜日（ただし 2 月 12 日は開館、翌日休館）
観 覧 料：一般／ 1,000（800）円
高校・大学生、65 歳以上／ 700（560）円
※（　）内は 20 名以上の団体料金
中学生以下、障がい者手帳をお持ちの方は無料
主　　催：郡山市立美術館
後　　援：デンマーク王国大使館、スウェーデン大使館
企画協力：株式会社ブレーントラスト

寄稿

祖父、土橋醇との対話

土橋素子（現代美術家）
www.motokodobashi.com

《希望の星》1977（昭和52）年　油彩、鉄板・板　郡山市蔵

祖父が亡くなった時三歳であった私には、生前の祖父の記憶がない。ただ、祖父の逸話は映画監督である父から、多少演出された形で聞かされてきた。

父の語り口によって情景が見えてくるようなエピソードの数々を、何度も繰り返し聞いていても、毎回楽しいものであった。私の印象の中の祖父は日々を楽しんで生き、情熱を持って制作し、男性も女性も惹きつける魅力的な人物で、絵描きとはこういうものかと、幼かったころの私は思っていた。

成人して自分もアーティストとして活動するようになると、祖父に対する思いも変わってきた。周囲の人々に見せていた顔とは違う、アトリエでの祖父、制作に向き合っていた姿を想像するようになった。筆致や、描かれた形を目で追いながら、その作品を作った時の気持ちを思い浮かべてみる。その形が生まれた過程を想像すると、祖父と直接対話しているような感覚を覚えるのだ。そして今回の郡山市立美術館での回顧展で、初期の作品から時間を追って一望できた事で、私の中の祖父の画業に対する理解はより深まったと感じている。それは、欠けていたパズルのピースが見つかったような、妙に納得する体験であった。

特に展覧会の最初の部分、具象的な作品の数々は初めて目にする物ばかりだった。オープニングの日に父と会場を歩いていた私は、そのうちの一つの絵の前で思わず立ち止まった。《雪原》という題のその作品には、雪景色の中でそりに腰掛けて休んでいる農夫風の男性の姿が描かれていた。これはひょっとして父が話していたあの人物ではないか。東京から幼い父を連れて疎開してきた祖父の一家に、何かと親切にしてくれた、聴覚障害のある近隣の男性。祖父の、彼に向けたあたたかい視線が、画面を通して感じられた。父のほうを振り返ると、そうだと頷（うなず）いている。祖父が独自の抽象表現に至る以前の自然主義的作品群は、故郷の赤津の風景と人々で彩られている。これらの風景を心に抱いている事が、後の半抽象的な心象風景に繋がって行ったのだなと想像した。

戦後渡仏してアンフォルメルに出会った祖父の作品の変化を見るのも大変興味深い。ファシズムの台頭と戦争で停滞していたヨーロッパの芸術が、再び花開くように沸き起こってきたアンフォルメルの動きは、日本で敗戦を経験した祖父の心に響いたに違いない。私は二〇〇〇年代にドイツ、ミュンヘンの美術大学で学んでいたのだが、その時に偶然にも絵画科の学生の間で、アンフォルメルが流行っていた。ジャン・フォートリエやアンス・アルトゥングの画集を古本屋で見つけて回し読みしていた。詩的で、シュールリアリズム的とも言える、深層心理に目を向けた抽象表現に共感を覚えたのだと思う。祖父の作品に於いても、荒い絵肌や存在感の強い鉄板の形態の中に、湖面の揺らめく光や星空、屹立（きつりつ）する大木のシルエット

が見え隠れする。それらの心象風景を孕（はら）んだ抽象表現は、描く事の可能性に真摯に向き合った結果生まれたもので、世代を超えて観る者の心に訴えかけてくる。

個人的に今回の展覧会で嬉しかったのは、旧郡山市立赤津小学校にあった壁画を見られた事である。体育館の上段に掛けられていた幅五mの大作は、見上げた視線の先に位置するように構成されており、《希望の星》という画題も、小学生が見上げた先にある未来の空というイメージを端的に表していてとても良い。私自身、パブリックアートを専門的に制作しているため、祖父のこの作品を制作した時の苦心や工夫がとても良くわかる。以前、幼稚園のファサードをデザインした際に空に飛び立っていく鳥の群れを描いた事がある。未来ある子ども達が毎日見る画はどんなものであるべきか。祈るような想いを込めつつ、自身のこれまでの制作の流れに添った画題を選ぶ。また、建物の特定の場所に設置される事の制限と効果を考える。《希望の星》は祖父の他の作品に比べてゆったりとした構図で描かれている。この構図が、必然的に距離をとって眺めなくてはならないこの作品の効果を高めている。見上げた先にある空に浮かぶ星々が奥行きを作り出し、その真ん中に吸い込まれて行くような感覚を与える。当時の小学生達と一緒に、自分も祖父に励まされているような、不思議な気持ちになった。

今回の回顧展を通して、作品の中に生きている祖父という人物を、四十年以上の時を経ても活き活きと感じる事ができた。この様な体験を抱いて今後の制作に向かうことが出来る事を、とても幸運に感じている。

企画展　土橋醇展　パリ、湖南 ― 幻想を追って　2023年９月２日（土）～10月22日（日）

安積郡赤津村（現在の郡山市湖南町赤津）に育ち、1950 年代、60 年代にパリで活躍した土橋醇（1909-1978）の展覧会。父・土橋華城（1884-1912）の作品と共に、その画業が初めて明らかにされました。

講演会　「父、土橋醇」

９月２日（土）
場所：多目的スタジオ
講師：土橋享さん
（映画監督）

対談　「土橋最後のアトリエ『愚魚庵』と壁画」

10 月 21 日（土）
場所：多目的スタジオ
講師：土橋千鶴子さん、
菅野洋人（当館館長）

文化講座　「ライヴ！白崎映美＆東北６県ろ～るショー!!」

９月 30 日（土）
場所：美術館前庭
出演：白崎映美＆東北６県ろ～るショー!!、
アポロチョコシアター

Jun Dobashi

令和４年度 新 収蔵作品紹介

令和４年度もみなさまのご協力により、新たに作品を収蔵することができました。

購入作品は、イギリスの現代美術家ハミッシュ・フルトン（１９４６―）の作品４点、太田喜二郎（１８８３―１９５１）の油彩画１点、辻永（１８８４―１９７４）の油彩画１点、酒井三良（１８９７―１９６９）の屏風作品１点、土橋醇（１９１０―１９７８）の油彩画１点の計８点です。

また、ハミッシュ・フルトンの水彩画１点を大谷芳久様から、野見山暁治（１９２０―２０２３）の油彩画３点を野見山暁治様ご本人から、土橋醇の油彩画１点を丹代美奈子様から、三木宗策（１８９１―１９４５）の木彫１点、石膏原型１点を三木康生様から、佐藤静司（１９１５―２０２１）のブロンズ作品１点を宇野洋子様から、南薫造の水彩画20点を南建様から、原撫松の水彩画１点と谷中安規の絵画作品１点、平塚運一らによる木版画の《愛書票暦》、清宮彬ら「榛の会」会員の年賀状47点組、明治・大正期の石版画作品など48点を丹尾安典様からご寄贈いただきました。

新たに収蔵した作品は、常設展などで順次展示していく予定です。

辻永《ブルーヂュにて》
1920（大正９）年　油彩・キャンバス

南薫造《ドアの前に立つ少女》
1907-1910（明治 40-43）年
水彩・紙

常設展示のご案内

2023 年 12 月 27 日（水）まで

1　イギリスの油彩画
2　画家とスケッチ
3　何に見える？色んなかたち
4　ヴォーティシズムとその周辺／佐藤潤四郎とガラス

2024 年 1 月 30 日（火）から

1　イギリス美術とモード
2、3　“雰囲気”を展示する
4　ブランギンの版画／工芸にみる造形美

『第十一回榛之会』年賀状
恩地孝四郎
木版・紙

『第十一回榛之会』年賀状
前川千帆
木版・紙

表紙の作品

アルバート・ジョゼフ・ムーア《黄色いマーガレット》
1881 年　油彩・キャンバス　当館蔵

ムーアは1841年、英国ヨークに生まれた画家です。古代ギリシャ風の衣装を身にまとった女性がリラックスした様子で描かれます。画面右側には扇が配され、当時流行した日本趣味を採り入れています。左下に描かれている花は、タイトルとなっている黄色いマーガレットです。ムーアは、本作のように古典的で優美な女性像を多く手がけました。

Report

企画展「大川美術館コレクションによる　20 世紀アート 120」関連

会期：2023 年 4 月 15 日（土）～6 月 11 日（日）

講演会「大川美術館と 20 世紀アートコレクション」
2023 年 4 月 29 日（土・祝）

場所：多目的スタジオ

講師：田中淳さん（大川美術館館長）

特別ギャラリートーク
2023 年 5 月 20 日（土）

場所：企画展示室

講師：大谷明子さん（大川美術館学芸員）

企画展「テレビシリーズ放送開始 15 周年記念　ひつじのショーン展」関連

会期：2023 年 6 月 24 日（土）～8 月 20 日（日）

ワークショップ「ショーンマルシェ」
2023 年 8 月 1 日（火）

場所：美術館前庭、階段ホール

協力：郡山市立美術館友の会

「ひつじのショーン展」にちなみ、前庭で夏野菜がディスプレイされました。
階段ホールでは、ペーパーアートなどの自由参加型のワークショップを開催、親子連れなどでにぎわいました。

第 21 回　風土記の丘の美術展
～郡山市内の小学生による作品展～

会期：2023 年 7 月 22 日（土）～8 月 18 日（金）
場所：美術館ロビー

市内を 4 つの地域に分けて、週替わりで展示しました。

「初心者のための木口木版画ワークショップ」
2023 年 10 月 1 日（日）、7 日（土）、8 日（日）、15 日（日）

場所：創作スタジオ

講師：野口和洋さん（版画家）

Information

第15回 風土記の空
―郡山市内の中学校美術部による作品展―

会　　期：2023年11月17日（金）～12月27日（水）
場　　所：美術館ロビー（入場無料）
参加中学校：日和田中学校、喜久田中学校、郡山第三中学校、郡山第四中学校
郡山第七中学校、緑ケ丘中学校、富田中学校、小原田中学校
西田学園（計９校）

郡山市内の中学生美術部による作品を美術館ロビーで展示します。
中学生が絵を額に入れたり、壁に絵を掛けたりする展示体験もおこないました。
中学生たちの個性あふれる作品をお楽しみください。

休館のお知らせ

2023年12月28日(木)
～
2024年１月29日(月)

年末年始及び諸設備点検のため上記期間休館いたします。

ご利用の皆様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

イベントのお知らせ 「演劇集団風煉ダンス　朗読音楽劇『まつろわぬ民2024　更地のうた』」

出　　演：白崎映美、佐藤正宏（ワハハ本舗）、堀井政宏、吉田佳世
演　　奏：ファンテイル（ギター）
作・演出：林周一

３・11以降の福島県浜通りに取材して創作された朗読劇。町の記憶や声が消されて生まれた更地での、スエ婆さんの現実と虚構入り混じる物語。主演の白崎映美（上々颱風）による歌も魅力の「朗読音楽劇」をご期待ください。

主　　催：郡山市立美術館
会　　場：階段ホール（入場無料）
日　　時：2023年２月３日（土）
午後５時30分開場
午後６時開演
参加者数：100名（要申込）
申込方法：次のいずれかの方法でご応募ください。
締め切り：1月19日（金）（必着）

インターネット
QRコードを読み込み、応募フォームからお申し込みください。

ハガキ
次の①～③をご記入のうえ、下の宛先までお送りください。
①参加希望者氏名（１通につき１名様）　②郵便番号・住所　③電話番号
宛先：〒963-0666　郡山市安原町字大谷地130－２
郡山市立美術館「更地のうた係」宛
※申込者多数の場合は抽選となります。結果はハガキにてお知らせします。

TOPICS

juju
130CAFE
ジュジュ イチサンマル カフェ

営業時間／ 11:00-17:00
電　　話／ 024-942-2250

【寒い季節におすすめするランチメニューのご紹介】

★当カフェのドリンクメニューは全てテイクアウト可能です。

●季節限定パスタサラダ・ドリンク付　**¥1,200円**

旬の食材を使用した「季節限定パスタ」の冬季期間の内容は毎年大好評のスープパスタで寒い冬を乗り越えていただきたいと思います。

12月・1月
◎クラムチャウダー風スープパスタ
野菜とあさりの旨味が凝縮された濃厚スープにジンジャーを加えて仕上げました。

2月
◎野菜たっぷりミネストローネのスープパスタ
トマト・たまねぎ・じゃがいも・人参・セロリ・かぼちゃなどの素材の旨味を引き出したスープパスタ。

※メニューや料金、営業時間は予告なく変更となる場合がございます。あらかじめご了承ください。

※カフェの年末年始及び１月の営業は、美術館ウェブサイトをご確認ください。

郡山市立美術館
Koriyama City Museum of Art
〒963-0666　福島県郡山市安原町字大谷地 130-2
TEL.024－956－2200　FAX.024－956－2350
https://www.city.koriyama.lg.jp/site/artmuseum/

発行日／令和５年12月15日

敷地内禁煙

FSC www.fsc.org ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C011278
VEGETABLE OIL INK 紙へリサイクル可